

私の7月23日

栄岩吉郎 (北松南高校)

東亜閣の前で、通り過ぎて行く何台目かのタクシーをやっとつかまえ、ずぶねれの身を車の中に。寺町を通過して鳴滝の自宅へ向う。あちらこちらの路地からは、泥水が滝のように勢いよく水しぶきをあげて吹き出ている。その泥水に当たるたびに、ズ、ズーッと30~40cmも横へ押し流されながら、車はノロノロと進む。

寺町から坂をくだり、中通りを経て電車通りに出ようとしても、中通りはすでに膝より上まで浸水している。仕方なく寺町通りを進む。こうしたことを何回か繰返し、やっと市民会館裏手の石橋にたどりついた。

中島川はすでに橋の上まで水嵩を増し、濁流で橋の表面はかくれ、欄干だけが濁流から顔を出していた。「お客さん、流されるときは一緒だよ」の声と共に、車は石橋を渡り始める。私は、いつでも車から這い出せるように、雨が降り込むのもかまわずに、窓ガラスを一杯にさげた。

無事に石橋を渡り終えた安心感で放心状態となった私を乗せ、車は公会堂横の坂道をのぼり市役所へと進む。このとき、車の無線が、いま私が渡ったばかりの石橋が決壊したことを告げた。わずかに3~4分の差だ。

渋滞でノロノロと勝山小学校の前から馬町に抜け、いたる所に乗り捨てられた車や電車の間をぬうように進み、新中川電停付近にたどりついたとき、運転手の「お客さん、私も車をあのガレージに入れて逃げるから、ここで降りて下さい」との声で、約4,000円を支払って車から降りた。

足首がかくれる程の流れに変わってしまった

電車通りを、一歩一歩足の指に力を入れしっかりと踏みしめながら、県立女子短期大学横の店にたどりついた。店の中にはすでに8名の男女が避難していた。「これから先へはどうしても進めない」という。店の親父がかざす懐中電燈にてらし出された光景は、今でも忘れることはできない。グランド横の暗渠を溢れた濁流は、すごい音とともに水しぶきをあげ、道を覆って流れており、私達が避難している店の下にあるガレージは水没し、車は全壊の状態で押しつぶされて重なり合い、小石がガラガラと音をたてそれらに当たっては流れ去っていった。

ローソクの灯で時計を見る。9時近くになっていた。その時になって目の前の赤電話に気が付き、自宅に電話するが話し中で通じない。何回目かでやっと電話が自宅に通じ、自分の居場所と無事を知らせた。私のあとで電話をかけていた娘さんが、急に「私の家が……」と叫ぶと、泣きながら外に出ようとした。引き止め事情をきくと、電話の途中「裏庭がくずれる……」とお母さんが叫んで、そのまま電話が切れたという。

その娘さんがどうしても帰るといってきかないので、私を含めて5人の者が、短大裏手の道が通れるかどうかたしかめてみるようになった。私が先頭になり、短大のグランドを通り抜け、短大裏に出る。濁流となった道に足を踏み入れ、膝までつかって一歩二歩と歩るきはじめたが、すぐ先へ進むのをやめた。2m程先に小さな数個の渦がまいており、その渦から10m程先から濁流が急にふきあがっているのが、暗がりを通してかすかに見えたからだ。(後日、現場に行つて

みると、道は完全に無くなり、私の背丈程にえぐられていた。)

帰ることの不可能をさと、再びもとの店にもどる。時計は10時近くをさしていた。いつ帰宅できるかわからなくなったので、再び自宅へ連絡をとろうとしたが、電話はすでに不通になっていた。

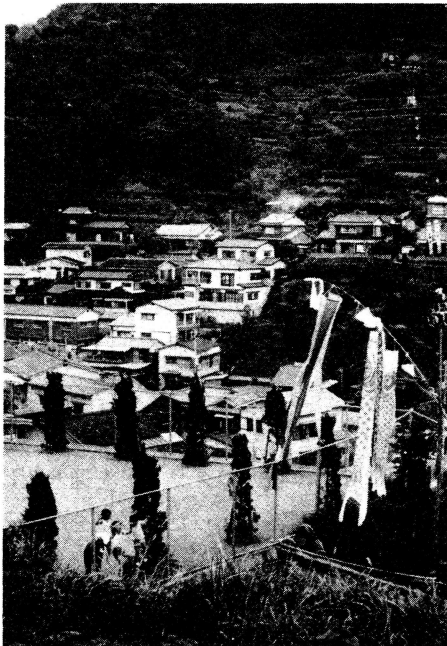
しばらくして、数名の消防団員がロープや懐中電燈を持って叫びあいながら店の前を通り過ぎて行った。娘さんは、消防団員につれて行ってもらおうと言い残し店を出た。名前はきいていないが、鳴滝の斜面崩壊による被害地付近の娘さんだったことは確かなので、今でもその娘さんにご家族が無事であることを祈っている。

12時過ぎには濁流も治まり、一人、二人と帰り始めた。私も店の親父に心から礼を言い、帰路についた。ほんの2時間前までは、激しい濁流となっていた短大横の道は、土砂が一面に堆積し、その堆積土砂の間を小川状に泥水が流れ

ていた。

シーボルト宅跡横の小さい鉄の橋には、被害家屋による流木がうず高く集積し、それに濁流がぶっかり水しぶきが滝のようにあたり一面に降りそそいでいた。その水しぶきの中を、シーボルト宅跡横の金網につかまりながら通り抜けると、すぐに、一階は濁流で壊され、残された数本の柱だけで二階を支えている家が目にとまり、災害の大きさをひしひしと感じた。

懐中電燈を持たないので、薄明りをたよりに要心しつつ県立女子短大の寮の横までたどりついたが、鳴滝の斜面崩壊による土石流で道路は決壊し、通れる状態ではない。しばらく様子を見ていたが意を決し、寮の金網と石垣にはいつくばいながら、やっと通り抜け、唯々気力だけで我が家にたどりついた。妻が沸かしておいてくれた風呂に入り、生気をとりもどして床についた時は、すでに24日の午前2時近くであった。



災害発生前



災害発生後

長崎市鳴滝の山くずれ (長崎新聞社提供)